

一八八三年二月十八日(日)

ベルガリヤ村のゴーヴィンダ・ムクルジェー氏の家において

—— 聖ラーマクリシユナはナレンドラをはじめとする信者達と共に讚神歌を樂しむ

聖ラーマクリシユナは、ベルガリヤ村(ドゥッキネーシヨルから4kmほど東)のゴーヴィンダ・ムクルジェーの家においてになった。今日は日曜日で、ファルゲン月七日。キリスト曆一八八三年二月十八日。マーグ白分十二日目、プシユヤの星宿<sup>ナクシヤ</sup> ナレンドラやラームをはじめ信者たちも来ていたし、近所の家の人びとも来ていた。七、八時ころ、最初にタクールは、ナレンドラたちといっしょに讚神歌<sup>キールタン</sup>に合わせて踊られた。

〔ベルガリヤ村の人びとへの教え——なぜ<sup>プ</sup>あいさつするの? なぜ<sup>バクテ</sup>信仰のヨーガなのか?〕

讚神歌が終わると、みんなは席に着いた。大ぜいの人びとがタクールにごあいさつ申し上げた。タクールは時々おっしゃる。「神様<sup>ブラナム</sup>にごあいさつなさいよ」それから、「あの御方が一切のものになっていらつしやる。だけど、或る場所には特別によく顯れていらつしやる——たとえば聖者のところみたいにね。悪人もいるし、虎やライオンだっているじゃないか、とお前たちは言うかも知れん。そりや、

虎神さまを抱きしめる必要は全くないんでね、遠くの方からごあいさつ申し上げて通り過ぎればいいんだよ。水を見てごらん、飲める水、神前に供える水、体を洗うのに使う水、いろいろある。(お尻を洗うだけにしか使われない水もある)」

近所の人「その通りでございます。ときに、ヴェーターンタとはいかなるものでございましょうか?」

聖ラーマクリシュナ「ヴェーターンタ派の人たちは、我は彼なり——ブラフマンのみ真実、この世界は虚いづわり、と言っている。私いづわりというのも虚いづわり、思い違いなんだ。ただ至高のブラフマンだけがある、と言う。

けれどもね、私いづわりというものはどうしてもなくならないよ。だから、私はあの御方の召使い、私はあの御方の子供、私はあの御方の信者、こう思っているのがたいそういいことなんだ。

今のようなこういう時代(カリユガ)には、信仰のヨーガが一番いいのだ。信仰を通じてあの御方に触れることができる。肉体の自覚があるからこそ、この世の知恵(相対意識)だ。色や形、味、嗅い、手触り、音など。これは皆、この世の対象もの。この知覚をなくすることは、とてつもなく難しいからね。この世間知があるかぎり、我は彼(原典註1)なり(ソーハム)私いづわりという感覚はやって来ない。

(原典註1) 肉体を持つ者たちにとって、非顕現の真理に達するのは甚だ困難である。——ギーター12・5——

(訳註) プシユヤの星宿——月の位置を27に分類したものを星宿うしよくと言い、8番目の位置をプシユヤと言う。

ほんものの世捨て人なら世間知はほとんどなくなっているが、世間に暮らしている連中は、始終あれこれ対象もののことしか考えていないのだから、だから大方、普通の人間は、私がは神様の召使い、と思つていいんだよ」

〔ベルガリヤ村の人へ罪についての話〕

近所の人「私どもは罪深い人間ですが、いったい私どもはどうなるのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方の名を称えて讚神歌をうたえば、身体からだについた罪なんか皆、飛んでいつてしまふよ。身体の樹に罪の鳥がとまる。称名と讚神歌は手を拍うつようなものだ。手をたたけば樹の上の鳥がみな飛び立つように、そっくりそれと同じこと、あらゆる罪は、あの御方の名を称えてほめ讃えることで消えてしまふ。(原典注)

それにホラ、野っ原にある池の水が、太陽の熱で自然に干上がつていくだろう。それと同じこと、称名と讚神歌で罪の池の水は自然に干上がつてしまふ。

毎日、訓練アライヤサをしなければいけない。サーカスを見たことがあるが、走っている馬の上に西洋の女が片足で立っていた。あれまでになるには、どんなに練習したとか。

それから、あの御方に会いたいと思つたら、少なくとも一回はそのために心の底から泣くこと。

この二つの方法——訓練アライヤサと渴望バクログ、つまり、あの御方に会いたくて、居ても立ってもいられない氣持ちになることだ。

〔ベルガリヤ村の人が六チャクラの歌をうたい、聖ラーマクリシュナ、三昧に入ること〕  
二階の部屋のベランダで、タクールは信者たちと共に食事をとられた。時間は午後一時である。皆の食事が終わるか終わらないうちに、下の中庭で一人の信者が歌いはじめた――

目覚めよ 目覚めよ いのちの女神

ムーラダーラに長く眠れるクンダリニーよ

タクールは、この歌を聞かれて三昧に入られた。身体は全く静止し、供物ブラサートの皿の上に手を置いたまま、絵の中の人物のようになられた。もちろん、もう召し上がることはなさらない。しばらくすると、やや平常に戻られてこうおっしゃった。「下にいく、下にいく」

一人の信者が、たいそう気をつけながら階下にお連れした。

朝方、神の御名を称えている間、タクールが讃歌をうたいながら踊っていたのはこの中庭である。坐るための敷物も広げてあった。タクールはまだ半三昧の状態で、歌い手の傍へ行かれてお坐りに

（原典註2）ただわたくしに庇護を求めよ

わたくしがすべての悪業報から君を救う ―― ギーター 18・66 ――

「なつた。歌い手は今しがた、歌い終わったところである。タクールは非常に謙虚な口調で言われた——  
「あなた、もう一度、大実母の御名を聞きたいものです」

歌い手は再び歌いはじめる——

目覚めよ 目覚めよ いのちの女神

ムーラダーラに長く眠れるクンダリニーよ

サハスラーラ  
頂上に昇るのが おんみの義務つとめ

主なるシヴァのもと 千弁の蓮華座に

サハスラーラチャクラには千弁の蓮の座に絶  
対神シヴァが居る

六つの階段きざしを通り 悲苦すべて消し去り

六つの階段——六チャクラのこと

かの靈妙壯麗なる至上の意識に——

歌を聞きながらタクールはまた、前三昧になられた。

## 第13章 ゴーヴィンダ・ムクルジーの家において